総門について

平成19年に建立された総欅造りの総門は、成田山新勝寺の表玄関として荘厳なたたずまいを見せています。また総高約15メートルで形式は、五間三戸の十二脚の楼門です。この総門は、成田山開基1070年祭記念大開帳を記念し創建されたとのことです。施工は宮大工の金剛組です。金剛組は、大阪四天王寺の宮大工金剛重光氏が飛鳥時代に創業したとされ、日本はおろか世界最古の建設会社になるということです。ここで本題に入る前に、以前この場所には、どんな門が有ったのでしょうか。成田支部の会員でも、覚えている方はそうはいないでしょう。ところが現在この門は、弘恵会土屋駐車場のゲートに設置されているのです。大本堂の左奥売店の広場の先を下がっていくと見えてきます。さて本題に戻りますと、外観の荘厳さに目が行きがちですが、細部の意匠にも見るべき処があります。総門をくぐってまず天井を見上げるとそこには細かな細工の格天井が見えてきます。さらに大梁を支える蟇股の彫刻が目に入ります。彫り物は十二支になっています。彫工は、塚原桂昌氏、福山政山氏、北澤一京氏の三人です。また、柱の根巻き部分の飾り細工や沓石も見逃さないでください。

仁王門について

総門をくぐり石畳を歩くと前に見えてくる門が仁王門です。この門は、総欅造りで三間一戸の八脚門で、1831年に再建されたとあります。この門で最初に目に入るのは、やはり東京築地の魚河岸の奉納による大提灯です。ちなみに浅草雷門の提灯（11尺）より一廻り小さい（8尺）ですが、重さは800kg有り、骨組みは砲金で出来ているため折りたたむことはできないそうです。普通見過ごしてしまいますが、提灯の下輪を真下から見てください。荘厳な龍の彫り物に出会うでしょう。ここでさらにちょっと左右に廻り込んでみましょう。そこには2m程の欅の堂羽目板が組み込んであります。もちろん今ではこんな板は、日本中探しても見つからないでしょう。江戸の文化と歴史に少しは触れることが出来ましたでしょうか。